

保 別 戸 古 墳 群

・ 2 0 0 2

財団法人 岐阜県文化財保護センター



保別戸古墳群全景



保別戸1号古墳全景

序

保別戸古墳群は国府盆地の南部、高山市との境をなす見量山（標高997m）北側の尾根先端部に位置し、瓜巢地区の集落を見渡すことができます。東側には寿美峠を越え高山市に通じる通称「瓜巢街道」が走っています。この街道は古くは越中街道の近道として利用され、現在も高山・国府間を結ぶ県道谷高山線として利用されています。

このたびの県営中山間地域農村活性化総合整備事業に伴い、本遺跡の所在する丘陵が削り取られ農地となります。この地区で約10haの農地が造成され、今後の新しい農業の展開が期待されています。

今回の発掘調査で、古墳時代前期初頭と考えられる古墳を2基確認しました。古墳の形状は方墳で、尾根を切断するようにまっすぐな溝が切られています。溝からは、土師器片や須恵器片、磨製石鏃などが出土しました。1号古墳の方は盛土が残っており、木棺と思われる痕跡も確認できました。墳丘が低く小規模であることから、弥生時代の墓の形を踏襲していると言えそうです。北陸地方に多い方形台状墓の影響を受けているとも考えられ、飛騨の古墳の始まりを考える上で貴重な資料を得ることができました。

本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、当地の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び出土品の整理・報告書作成にあたりまして、多大な御支援・御協力をいただいた関係諸機関並びに関係者各位、国府町教育委員会、国府町農林商工課、地元地区の皆様へ深く感謝申し上げます。

平成14年3月

財団法人 岐阜県文化財保護センター
理事長 服部 卓郎

例 言

- 1 本書は岐阜県吉城郡国府町瓜栗に所在する保別戸1号古墳（岐阜県遺跡番号21622-09660）・保別戸2号古墳（岐阜県遺跡番号21622-09661）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は県営中山間地域農村活性化総合整備事業（南吉城地区）に伴うもので、岐阜県基盤整備部農山村整備局から岐阜県教育委員会が委託を受けた。発掘調査は財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。
- 3 発掘調査は平成13年度に実施し、八賀晋三重大学名誉教授の指導のもと森下茂司が担当した。
- 4 本書の執筆は第2章第1節を下畑五夫氏（飛騨子供相談センター所長）が担当し、他は森下が行った。編集は森下が行った。
- 5 遺物の写真撮影はアートフォト 右文に委託して行った。
- 6 地形測量は大同コンサルタンツ株式会社に、空中写真測量は国際航業株式会社に委託して行った。
- 7 発掘調査及び報告書の作成にあたって次の方々や諸機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。
赤澤徳明・岩花秀明・押井正行・下畑五夫・鈴木元・高野陽子・松本優・和気清章
国府町教育委員会
- 8 本文中の方位は、国土座標第Ⅶ系の座標北を示している。
- 9 土及び土器類の色調は、小山正忠・竹原秀雄1997『新版標準土色帖』（財団法人日本色彩研究所）による。
- 10 調査記録及び出土品は財団法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

目 次

序

例言

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 発掘調査の経緯	2
第2章 遺跡の環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	11
第3章 基本層序	14
第4章 遺構と遺物	17
第1節 遺構・遺物の概要	17
第2節 保別戸1号古墳	17
第3節 保別戸2号古墳	24
第4節 その他の遺構・遺物	25
第5章 まとめ	28
参考文献	30
写真図版	

挿 図 目 次

図1 保別戸古墳群の位置……………1	図12 保別戸1号古墳主体部(1)……………20
図2 調査前地形測量図……………2	図13 保別戸1号古墳主体部(2)……………21
図3 遺構配置図……………3	図14 保別戸1号古墳出土遺物……………22
図4 保別戸古墳群周辺の地形図……………8	図15 保別戸1号古墳遺物出土状況……………23
図5 保別戸古墳群周辺の地質図……………10	図16 保別戸2号古墳遺物出土地点……………24
図6 保別戸古墳群周辺の古墳分布図……………12	図17 保別戸2号古墳出土遺物……………24
図7 B区土層断面位置図……………14	図18 S X 1……………25
図8 B区土層断面図(1)……………15	図19 S X 2・S X 3……………26
図9 B区土層断面図(2)……………16	図20 S X 1出土遺物……………27
図10 保別戸1号古墳平面図……………18	図21 S X 1遺物出土状況……………27
図11 保別戸1号古墳墳丘断面図……………19	

表 目 次

表1 保別戸古墳群周辺の古墳……………13	表2 土器観察表……………27
-----------------------	-----------------

写 真 図 版

巻頭図版 保別戸古墳群全景 保別戸1号古墳全景	図版7 保別戸2号古墳全景 保別戸2号古墳表土掘削後の状況
図版1 保別戸古墳群全景 保別戸1号古墳全景	図版8 保別戸2号古墳磨製石畿出土状況 作業風景
図版2 保別戸1号古墳調査前 保別戸1号古墳調査後	図版9 S X 1 S X 1須恵器有台坏出土状況
図版3 保別戸1号古墳表土掘削後の状況 保別戸1号古墳主体部検出状況	図版10 S X 2 S X 3
図版4 保別戸1号古墳木棺痕跡検出状況(1) 保別戸1号古墳土層断面	図版11 保別戸1号古墳出土遺物 土師器高坏 須恵器甕 須恵器甕
図版5 保別戸1号古墳木棺痕跡検出状況(2) 保別戸1号古墳主体部完掘状況	図版12 保別戸2号古墳・S X 1出土遺物 磨製石畿 須恵器高坏 須恵器無台坏 須恵器有台坏
図版6 保別戸1号古墳土師器高坏出土状況 保別戸1号古墳須恵器甕出土状況	

第1章 発掘調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

本遺跡は吉城郡国府町瓜菓字保別戸に所在し、見量山北側の尾根先端部に位置する。古墳の存在は平成2～4年度に国府町教育委員会が実施した遺跡詳細分布調査によって1基が確認され、『国府町遺跡地図』に記載されている。

今回の発掘調査は、岐阜県基盤整備部飛騨地域農山村整備事務所による県営中山間地域農村活性化総合整備事業（南古城地区）に伴うものである。本遺跡の所在する丘陵が農地造成工事の対象地となるため、事前に本発掘調査を実施し記録保存を行うこととなった。

1999年8月5日と11月15日に岐阜県教育委員会文化課・国府町教育委員会・財団法人岐阜県文化財保護センターにより現地踏査を行い、古墳2基を想定した800㎡を本発掘調査の対象とした。

本発掘調査は、2001年（平成13）に岐阜県基盤整備部農山村整備局から岐阜県教育委員会が委託を受け、財団法人岐阜県文化財保護センターが実施した。

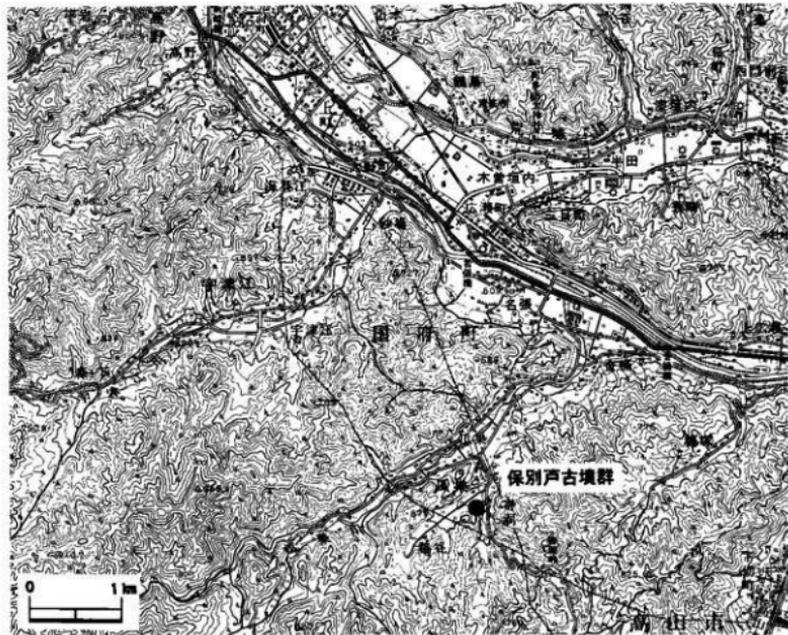


図1 保別戸古墳群の位置（国土地理院発行1:50000地形図「飛騨吉川」より）

第2節 発掘調査の経緯

本発掘調査は、2001年（平成13）5月中旬から9月末まで、約4か月にわたって実施した。

調査に入る前に、現地で指導調査員の八賀晋三重大学名誉教授から、「古い時期の古墳で木棺直葬の可能性もある。マウンド頂上部で十字に交わる土層観察用のアゼを残し、慎重に掘削を進めるように」と指導を受けた。

5月初旬に現場事務所を設営し用具の搬入を行った。

その後、事前地形測量を実施し調査区画杭を設置した。調査区内は国土座標上の南北方向を基準として5m×5mに区画し、南から北に向かってA～Q、西から東に向かって1～11とした。調査区内に2基の古墳を想定して調査区をA・B2区に区分し、尾根の北側先端部をA区、A区南側の標高が約10m高くなった地点をB区とした。

A区は既に人為的な盛土が見てとられ、その南側には尾根を切断するように溝が切られていた。盛土の南東側には、『国府町遺跡地図』に「盗掘跡」と記されている窪みも確認でき、溝の南側にも低いマウンドが見られた。B区にも北側にマウンドが見られ、古墳である可能性が考えられた。

作業は全て人力で行った。表土及び包含層掘削時においては、切り株や木の根が多く、作業は困難を伴った。

遺構の実測は、主体部・墳丘・溝等はサイトシステムで行った。主体部断面・土坑断面は1/10の縮尺、墳丘断面は1/20の縮尺で手測りで行った。空中写真測量は1/50の縮尺で行い、主体部・墳丘・溝の平面図とすると共に遺跡内での位置を確定する資料とした。

遺物の取り上げはサイトシステムで行った。

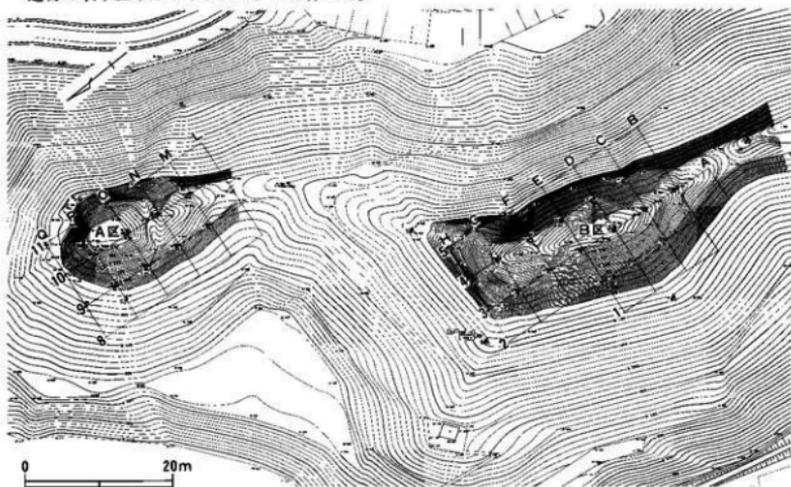


図2 調査前地形測量図

以下、週ごとに調査経過を記述する。

第1週 (5.14~5.18) 現場作業開始。登山道整備、調査区内の下草除去から始める。安全対策として木杭を打ちロープを張った。B区の腐葉土除去。

第2週 (5.21~5.25) A区の腐葉土除去。B区から調査を始める。十字に交わる土層観察用のアゼを南北に1本、東西に3本設定し、アゼを残して表土掘削を開始。

第3週 (5.28~6.1) B区の南側から表土掘削を進める。遺構と思われる黒っぽい色のプランを検出。プラン上の切り株を除去すると準大の礫の並びが現れた。

第4週 (6.4~6.8) B区の表土掘削を北側へ進めると、前週検出された礫の並びと同様の礫層を複数検出。褶曲した地盤の風化礫である可能性が高いと考えられた。

第5週 (6.11~6.15) B区の表土掘削終了。B区の北側に尾根を東西に切るまっすぐな溝を検出。B区も古墳である可能性が出てきた。B区のアゼの土層断面を実測。A区についても、墳頂部で十字に交わる土層観察用のアゼを南北に1本、東西に2本設定し、アゼを残して表土掘削を開始。墳丘南東側の表土から須恵器片が2点出土。

第6週 (6.18~6.22) A区墳丘部の表土掘削を進める。墳丘の南東側から同一個体の須恵器片が14点出土。

第7週 (6.25~6.29) 盗掘跡と考えられている窪みを掘削。困い地山に行きついたことから、盗掘跡ではない可能性も出てきた。A区の表土掘削終了。墳丘西側の裾部は岩盤に達した。溝の南側の低いマウンドもすぐに岩盤の地山となり、古墳である可能性はなくなった。27日に下畑五夫関連指導調査員による地質調査。これまでに検出された礫の並びは、地層の割れ目にマグマが流れ込んで岩石となったものであることが判明した。

第8週 (7.2~7.6) A区の溝を中心に掘削。南北に設定したアゼの東側の溝から須恵器片が約30点出土。さらに深く掘削を進めると、アゼの西側の溝から土師器片が20点出土。その後、A区の墳頂部で十字に交わるアゼに幅20cmのトレンチを設定し、地山に達するまで掘削。

第9週 (7.9~7.13) A区からB区への登り道に横穴等が検出できないか表土掘削。13日に遺構検出作業。トレンチの土層断面から遺構ライン、木棺と思われる痕跡を検出。

第10週 (7.16~7.20) A区墳丘にテラスが検出できないか裾部を掘削。炭の小片が各所に出てきた。B区への登り道にプラン検出。A区の土層断面の実測開始。

第11週 (7.23~7.27) B区の溝から磨製石鏃が出土。遺物の出土によりB区北側も古墳である可能性が高くなった。溝にかかるアゼは残し、その他のアゼを外す作業に取りかかる。B区のマウンド中心にかかっているアゼを外したが、遺構は検出できなかった。

第12週 (7.30~8.3) A区のアゼを外す作業に取りかかる。溝にかかるアゼから須恵器片がほぼ完形で出土。墳頂部の掘削した土はふるいにかけて調べる。A区溝のさらに南側の表土を掘削すると、炭を多く含んだプランを検出。(このプランをSX1とする。) 須恵器片も約30点出土。30日に八賀晋三重大学名誉教授から、これまでの調査結果をもとに指導を受ける。A区古墳(仮称)1号古墳、B区のマウンドも古墳と考え(仮称)2号古墳とする。

第13週 (8.6~8.10) 1号古墳主体部の検出作業開始。礫の分布状況をもとに墓坑を検出し半裁して掘削。遺構実測開始。B区のさらに南側にも溝がないか表土を掘削すると、炭を含んだプランを検出。

6 第1章 調査の経緯

第14週 (8.13～8.17) 作業休止。

第15週 (8.20～8.24) 1号古墳主体部に木棺痕跡を検出。SX1・SX2・SX3を半裁し掘削。SX1からは須恵器片が出土。SX2・SX3からは遺物の出土はなかった。B区への登り道を幅を広げて表土掘削。

第16週 (8.27～8.31) 主体部を掘り下げ、掘削した土はふるいにかけて何が何も検出できなかった。空撮の準備として、1号古墳墳丘部の切り株を除去し残っていた立木を伐採。現地説明会のために登山道を整備。

第17週 (9.3～9.7) 6日に空中写真測量及び調査区全体写真撮影実施。

第18週 (9.10～9.14) 作業休止。

第19週 (9.17～9.22) 22日に現地説明会実施 (約80名参加)。

第20週 (9.24～9.28) 1号古墳墳丘内に遺構の有無を確認するため墳丘解体作業を行ったが、遺構は検出されなかった。用具の片付け・搬出を行い現場作業終了。29日に現場事務所を撤収。

10月1日からは財団法人岐阜県文化財保護センター国府整理所にて整理作業に入った。

なお、10月10日、調査の結果に基づき、財岐保第58号の3により、文化財保護法第57条の6第1項の遺跡発見の通知を提出した。平成13年10月17日付社文第34号の17で、岐阜県教育委員会教育長から保別戸2号古墳 (21622-09661) として岐阜県遺跡地図に登録し、これに伴い保別戸古墳を保別戸1号古墳とする旨の通知を受けた。

発掘調査及び整理作業の体制は以下のとおりである。

調査部長	武藤貞昭
調査部次長	片桐隆彦
担当調査課長	上原真昭
担当調査員	森下茂司

第2章 遺跡の環境

第1節 地形・地学的環境

(1) 保別戸古墳群周辺の地形

保別戸古墳群は国府町瓜栗の中心に位置している。

この瓜栗について、『斐太後風土記』は次のように説明している。「広瀬の郷にて、此の村のみ幽すいの山中に住て、四方は山々多く、殊に水源大野郡小鳥郷の彦谷山、大多和山の峰境、南は大野郡三枝郷の見量山の峰境にて、山々広大なれば、年々山栗・竹の子・菌類を取り、薪を伐出、年に依りては材木をも伐り出し、半は山幸を得て栖める村家なれば、古くからの村民は、心得て木種を施し」とある。

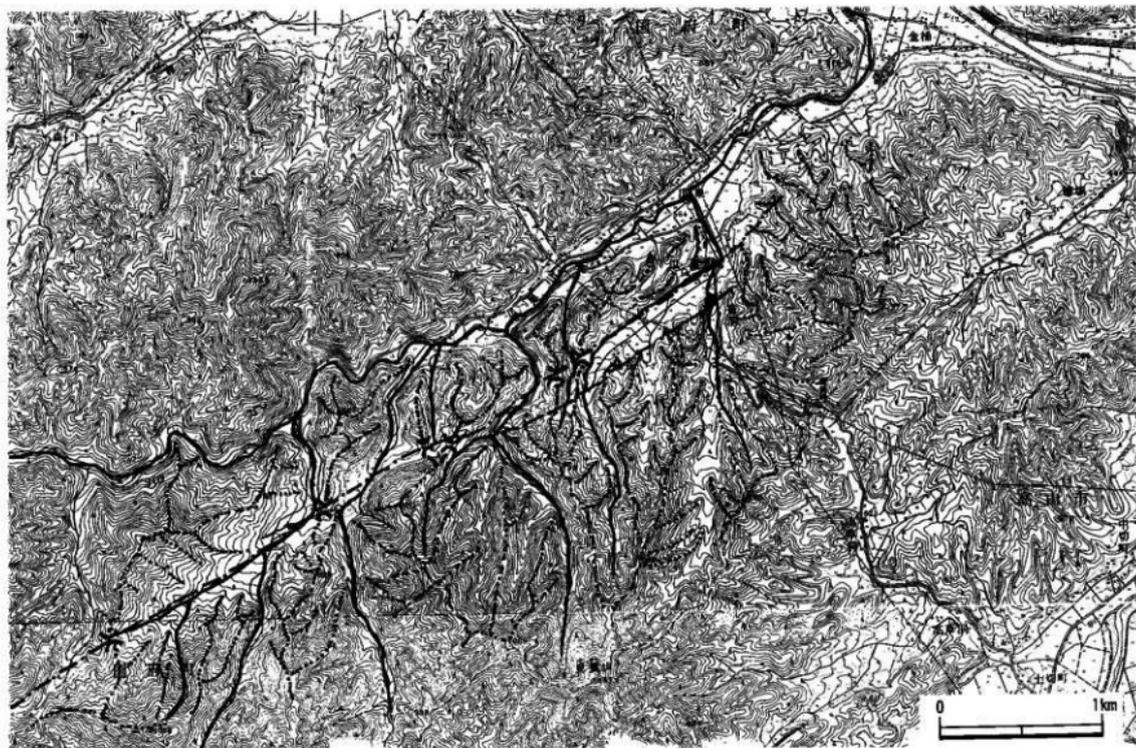
このように、瓜栗は宮川の支流瓜栗川及び瓜栗川に注ぐ脇谷川などのつくる、標高が550～600mの細長い平地と、これを取り巻く700～1000m余の山々からなり、瓜栗谷に暮らした人々は、これら周囲の山々から豊かな恵みを得ることができたと述べられている。

この谷は北東～南西方向に細長く直線上に伸び、北東方向に開口している。宮川の南西側にある宇津江・高野・平岩・畦畑などの谷も同じ走向でほぼ直線上に形成されており、瓜栗谷と平行している。このことは、瓜栗谷も含めて、これらの谷の形成には断層が深く関与していることを窺わせる。

保別戸古墳群は、脇谷の入り口付近で、南に位置する見量山から北北東方向へ伸びてきた尾根の先端部にある。尾根の先端部付近に位置する保別戸1号古墳の標高は594m、この周囲の平坦面の標高がおおよそ574m余であり比高は約20mである。また、同じ尾根筋の約56m南に位置する保別戸2号古墳は、1号古墳より一段高い標高604mに位置している。両古墳の間には標高593mの小規模な鞍部が存在する。さらに、2号古墳の南側にも602mの鞍部がある。2基の古墳が造られているピークの他にも、古墳のある痩せた尾根には、それぞれの鞍部からの比高が10数m及び数mの2つの小ピークがある。

これらの鞍部や小ピークは、一見断層運動によって生じた凹地すなわちケルンコルや凸地すなわちケルンバットのように見える。しかし、この部分のケルンコルやケルンバットが一定の方向に連続しないこともあって、断層活動が原因でできたかどうかは断定できない。ただ、最北端の1号古墳のある尾根部分は、1号古墳と2号古墳の鞍部付近を境にして、南からほぼ直線上に伸びてきた痩せ尾根から東へ約30mほどずれている。このずれは、この付近に見られる北東～南西方向の右ずれ断層と同じ移動センスである。また、1号古墳と2号古墳の間の鞍部から北東及び南西方向の地形を調べてみると、数本の尾根に右方向への屈曲が認められ、この部分に断層存在の可能性が考えられる。

痩せ尾根の両側の斜面は凹凸の少ない平板状で、急斜面をなし、あたかも土塁のようなたいそう細長い特異な形態をしている。この尾根の東側直下には、見量山に源を発する脇谷川が流れている。この脇谷川は、尾根の東側の平板状斜面の形成に関与したと思われる。一方、同じような形態の西側斜面の形成に関与するような谷川は認められない。ただ、この付近にはこのような細長い尾根が何本か認められ、河川の侵食以外の作用、おそらく断層の作用が加わったことが予想される。



- | | | | |
|--|--|---|--|
|  三尾断層 |  尾根 |  ケルンコル |  瓜樂川支流の屈曲 |
|--|--|---|--|

図4 保別戸古墳群周辺の地形図（国土地理院発行 1：25000地形図「飛騨古川」「三日町」より）

(2) 三尾断層——保別戸古墳群周辺の地形に大きな影響

保別戸古墳群の辺りに小規模な断層の存在が推定されたが、航空写真を調べると、この北西側にはかなり明瞭なリニアメントが認められる。また、地形図からはそのリニアメントの部分が白くほやけた線状模様になっているのが分かる。白いということは、この部分の等高線の間隔が周りより広い、すなわち緩やかな地形になっていることを意味している。比較的幅のある破碎帯を伴った活断層が存在していると考えられる。

このリニアメントに沿って、もう少し詳しく地形を調べてみたい。

保別戸古墳群の位置する瘦せた尾根の北西側には、脇谷という細長い平坦地が北東～南西方向に伸びている。この脇谷の北西端の山裾は直線状になっている。この直線を南西方向へ伸ばしていくと、2kmの間に細い尾根を切る明瞭な鞍部が5か所も認められる。活断層によって形成されたケルンコルであろう。さらに南西方向に直線を伸ばしていくと、3か所のケルンコルを経て、清見村の三尾に達する。このように、活断層が推定されたリニアメント上には、幾つものケルンコルが直線状に並んでいる。さらに、このリニアメント部分では、瓜巢川の少なくとも4本の支流が大きく右方向へ屈曲している。そのずれ大きさは、およそ数100mと推定される。

これらの特徴的な地形から、ここには確実度Ⅰ、活動度B～C、変位量が250～1000mの右ずれの活断層があると思われる。清見村三尾付近で最初に記載されたためか三尾断層と命名されているが、明瞭な断層地形が残されているのはむしろ瓜巢地区である。この三尾断層は、脇谷辺りで2～3本の断層に分岐しているように見える。そのうちの南側の1本が、先に述べたように保別戸古墳群の辺りを通っているのではなかろうか。

(3) 地質

瓜巢地区はそのほとんどが濃飛流紋岩の分布域である。しかし、寿美峠（高草洞峠）から寄洞、保別戸古墳群のある尾根及びその北側に北東方向に伸びる尾根の先端部、さらに高堂城登り口から東側には、船津花崗岩類の仲間である広瀬花崗岩が分布している。広瀬花崗岩は、国府町広瀬町を中心に上広瀬・糠塚・金桶・名張・宇津江・海具江・三日町・養輪などに分布している。したがって保別戸古墳群付近は、広瀬花崗岩分布域の西端に当たる。この広瀬花崗岩と濃飛流紋岩は断層で接している。

①広瀬花崗岩（船津花崗岩類）

船津花崗岩類は中生代三畳紀に形成された。主に飛騨変成岩類の北及び南縁に分布する。船津花崗岩類の仲間には、広瀬花崗岩をはじめとして、船津花崗岩・水無花崗岩・森安花崗岩・ミロナイトなどがある。広瀬花崗岩は、粗粒、やや暗色で、有色鉱物として黒雲母・角閃石を、無色鉱物として斜長石・石英を含む。

保別戸古墳群付近では、濃飛流紋岩との境界付近ということもあり、かなり風化が進んでいる。ほとんど組織が認められず、赤土状になっている。したがって、尾根を削ったり或いは盛り土をしたりしての古墳造営は比較的容易であったと思われる。

なお、保別戸2号古墳辺りには、石英脈の貫入が認められた。石英は風化に強いため、表土を剥いだ部分に幅30cm程度の帯状の岩塊の連なりとして露出している。一つ一つの岩塊は、10数cm程度のプ

ロック状になっている。

②濃飛流紋岩類

保別戸古墳群のすぐ西側には、濃飛流紋岩が広く分布している。濃飛流紋岩は、中生代白亜紀の末から新生代の初めにかけて、岐阜県を中心に発生したきわめて大規模な火山活動によって形成された。まず最初に、大規模な火砕流が発生しそれが厚く堆積した。そして、この火砕流堆積物を構成している火山灰・溶岩片・異質岩片などが、自らの重みと熱によって固く押し固められ溶結凝灰岩となった。濃飛流紋岩の大部分は、このような溶結凝灰岩である。巨大噴火が何回か繰り返された結果、やがて、面積は岐阜県の3分の1にも相当するおよそ4000km²平均の厚さがおよそ2000mにもなった。

濃飛流紋岩は板状節理の発達している部分が多くあり、平坦面が得られることから、あちこちの遺跡の炉や竈などに利用されている。ここ瓜果地区にも板状節理の発達した濃飛流紋岩が見られるが、保別戸古墳群には利用した様子が無い。もっとも、保別戸古墳群辺りは、三尾断層という活断層などが通っていることもあって、濃飛流紋岩も風化が進んでおり、このことも濃飛流紋岩が用いられていない理由かもしれない。

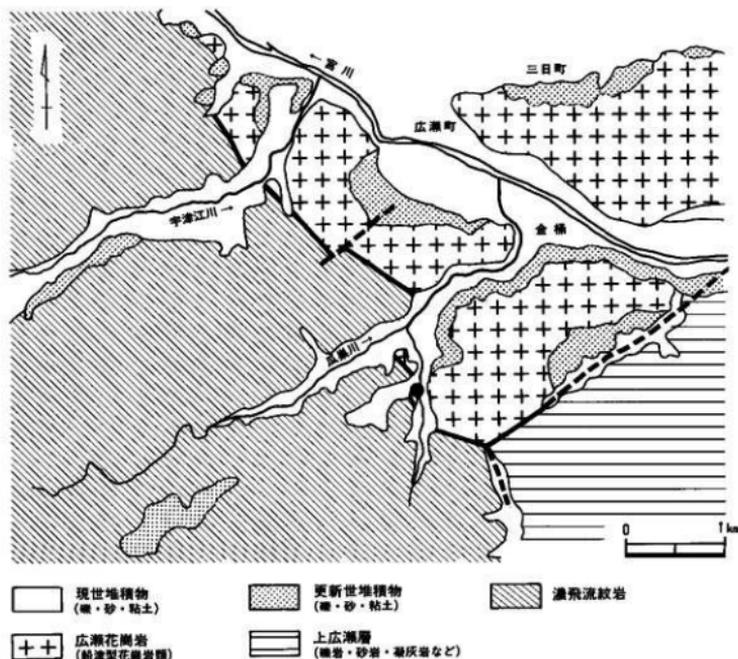


図5 保別戸古墳群周辺の地質図

参考文献

- 佐々木嘉三・小井土由光 1995『岐阜県の活断層』岐阜県
 富田禮彦 1915『斐太後風土記』大日本地誌体系刊行会
 野沢保・河田清雄・河合正虎 1975『飛騨古川地域の地質』地質調査書所
 活断層研究会 1991『新編日本の活断層』東京大学出版会

第2節 歴史的環境

保別戸古墳群は国府盆地の南部、国府町瓜巣字保別戸に所在し、見量山（標高997m）を境に高山市と隣接する。東側には高山市に通じる通称「瓜巣街道」が走り、古くから越中街道の近道として利用されてきた。飛騨における北陸との交流はすでに縄文時代から見られる。

『国府町遺跡詳細分布調査報告書』（1990）では、国府町内に縄文時代の遺跡を98か所、弥生時代の遺跡を19か所、そして380余りの古墳（台帳上遺存扱いになっている古墳は146か所330基、滅失・その他を含めると163か所383基）を確認している。古墳の数は高山市の86基、古川町の102基に比べても断然多い。

表1・図6は保別戸古墳群を中心とした周辺の主な古墳である。国府盆地の中心部、荒城川と宮川に挟まれた地域には、飛騨で最大最古の前方後円墳とされる三日町大塚古墳が存在する。三日町大塚古墳は墳長約100m、前方部先端が古期の形態を示し二段築成である。築造時期は4世紀後半と推定される。その南東に当たる宮川右岸段丘上には、横穴式石室を持つ峠口古墳や広瀬古墳が存在する。こう峠口古墳は大型石材を用い、約14mにも及ぶ県下最大規模の石室を持つ。山上にかけ12基を数える庚申洞古墳群も存在する。西端には板状石材を使用した和田口古墳（国府町上広瀬）が存在する。また、宮川左岸段丘上には群集墳が点々と存在する。さらに、国府盆地の北、荒城川北部山麓一帯には数群に分かれ100余基が分布する。

このように古墳が盆地に集中することは、その背景として農業生産が必要であり、河川流域の肥沃な土壌を利用し、沖積面の比較的広い盆地の水田化が進み生産力が高まったことを示している。1994年に発掘調査された立石遺跡（国府町漆垣内）では、縄文時代晩期の地層から稲のプラントオパールが多数検出されている。また、1989年に半田垣内遺跡（国府町三日町）では古墳時代の水田面と推定される遺構が検出され、1992年には深沼遺跡（国府町西門前）でも弥生時代の水田遺構が検出されている。

保別戸古墳群の所在する瓜巣地区には、瓜巣川兩岸の山麓から山上にかけ13基を数える土洞古墳群、かうと洞1・2号古墳（かうと洞2号古墳は板状石材を用い、飛騨地域における導入期の横穴系埋葬施設を持つ。石室の規模は長さ約3m×幅1.6mの長方形を呈する。）など、14か所32基の古墳が点在している。縄文時代の遺跡は11か所、古窯跡も5か所確認されている。本古墳群から北東約600mに位置する大洞経塚・古窯跡は、国府町教育委員会により発掘調査が実施された。また、本古墳群の裏側となる見量山南東山麓にも、1996年に財団法人岐阜県文化財保護センターが発掘調査を行った与島古墳群など、古墳群が集中している。



図6 保別戸古墳群周辺の古墳分布図（国土地理院発行 1：25000地形図「飛騨古川」〔三日町〕より）

表1 保別戸古墳群周辺の古墳

番号	古墳名	時期	形状	立地	規模・特徴・出土遺物など
1	保別戸古墳群1・2号	4世紀前半	方墳	尾根先端	本書報告遺跡。
2	南垣内1~3号古墳	5世紀初頭		河岸段丘	円形周溝墓。直径19・22・19m。2号墳から土師器埴出土。1990年発掘調査。
3	半田神岡古墳群1~5号		円墳	山麓	直径8~12m。2・3号は横穴式石室。
4	三日町大塚古墳	4世紀後半	前方後円墳	平地	飛騨で最大最古の前方後円墳。墳長約100m。後円部の直径約55m。高さ8m。前方部の長さ40m。
5	歩み山古墳群1~8号		円墳	山腹	直径9~15m。
6	十王堂古墳1・2号	6世紀	円墳	山麓	2号古墳から勾玉・管玉出土。
7	亀塚古墳	5世紀	円墳	平地	帆立貝式古墳? 直径約70m。竪穴式石室2基。甲冑・直刀・鉄鏃・勾玉出土。
8	広瀬古墳	7世紀	円墳	平地	二段築成の円墳。横穴式石室。
9	こう峠口古墳	7世紀	円墳	平地	全長72.7m。黒内最大の横穴式石室(約14m)を持つ。一番奥の天井石は幅3.6m。玄室内に組合わせ石棺の一部が遺存。
10	庚申洞古墳群1~12号		円墳	山上	直径6~16m。
11	まご塚古墳	6世紀後半	円墳	平地	二段築成の円墳。管玉・耳環出土。
12	比丘尼塚古墳		円墳	山麓	直径21m。
13	海具江古墳		円墳	山麓	横穴式石室。
14	ウシロゴ古墳群1~8号		円墳	山腹	直径8~11m。3号古墳は初期横穴式石室。
15	十二栢古墳		平地	六角墳? 径20m。	
16	かうと洞古墳1・2号		円墳	山腹	初期横穴式石室。
17	土洞古墳群1~13号		円墳	山腹	直径4.5~11m。
18	志を洞古墳		円墳	山麓	直径10m。
19	岩崎古墳群1~4号		円墳	尾根先端	1号古墳から鉄剣、2号古墳から直刀出土。
20	六郎洞1・2号古墳		円墳	尾根先端	直径7~9m。
21	中切上野古墳群1~6号	7世紀中葉?	円墳	山腹	直径9~14m。
22	上切寺尾古墳群1~6号	7世紀後半?	円墳	山稜	直径5~11m。1~6号の他に12か所ほどのマウンドが東西150mの間に並ぶ。高山市に現存する古墳群では最多。
23	与島古墳群1・3~6号	7世紀	円墳	山腹	直径7~11m。1号古墳は無袖式の横穴式石室で7世紀前半。3・4号古墳は両袖式の横穴式石室で7世紀中葉。1996年3・4・6号古墳を発掘調査。
24	赤保木1~5号墳		円墳	河岸段丘	5号古墳は5世紀中頃。竪穴式石室1基、箱式石棺1基。鉄剣出土。1992年発掘調査。
25	冬頭王塚古墳	5世紀後半	円墳	平地	二段築成の円墳。直径20m。竪穴式石室2基。直弧文虎角装具鉄剣・素面鏡・鉄鏃・管玉出土。1968年発掘調査。
26	冬頭山崎1号古墳 冬頭山崎2号古墳 冬頭山崎1号横穴	6世紀末 5世紀末 7世紀後半	円墳 円墳 丘陵斜面	丘陵尾根 尾根先端 丘陵斜面	両袖式の横穴式石室。須恵器出土。1998年発掘調査。 二段築成の円墳。竪穴式石室。鉄剣・鉄鏃・弓出土。 1998年発掘調査。 横穴。管玉出土。1998年発掘調査。

第3章 基本層序

A区では、1号古墳墳頂部で十字に交わる土層観察用のトレンチを設定して調査を進めた。尾根上のため堆積土は少なく、層序は上層から下層の順番にⅠ～Ⅳの4層に分層した。

Ⅰ層 腐葉土。5～10cmほど堆積している。

Ⅱ層 (図11の4 a～4 d) 明褐色又は黄褐色の砂質土であるが、やや粘性やしまりを持つ土質も認められる。2～10cmの礫を多く含む場所もある。木の根が至る所に広がっている。層の厚さは約15～50cmまでと一様ではない。ごく少量の炭が混入し須恵器片が包含される。

Ⅲ層 (図11の5 a～5 h) 土色は明褐色又は黄褐色でⅠ層とあまり違いがないが、土質はⅠ層より粘性やしまりがある。風化した礫を多く含んでいる部分もある。墳丘の一部や北側・西側の裾部にしまりのある赤褐色土層も認められる。層の厚さは約10～40cmまでと一様ではない。特に北側裾部が厚くなっている。主に土師器片が包含される。

Ⅳ層 明褐色土から褐色土の地山である。土質はかたくしまっている。東側裾部や墳丘の南側は、地山が岩盤で形成されている。

B区においても、丘陵頂部で十字に交わる土層観察用のアゼを南北に1本、東西に3本設定して調査を進めた。層序は上層から下層の順番にⅠ～Ⅲの3層に分層した。(図7～9)

Ⅰ層 腐葉土。4～10cmほど堆積している。

Ⅱ層 褐色土又は明赤褐色土。風化の進んだ土と見られる。褐色土は粘性・しまり共にややある。明赤褐色土は粘性はないがしまりはややある。木の根が至る所に広がっている。層の厚さは20cm前後と比較的安定している。

Ⅲ層 褐色土又は明赤褐色土。土質はかたくしまっている。2～20cmの風化した礫層を多く含んでいる。

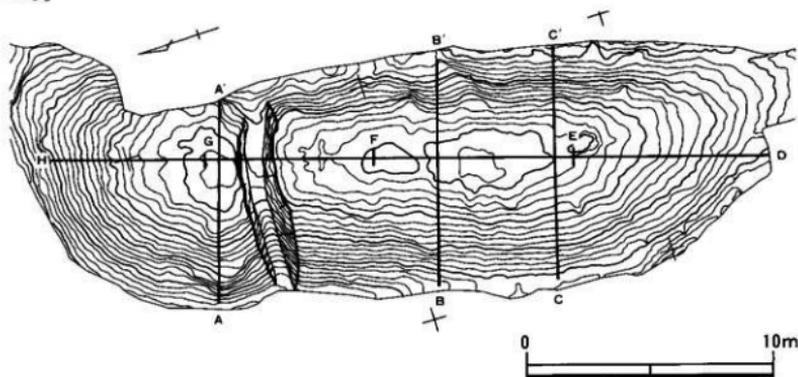


図7 B区土層断面位置図

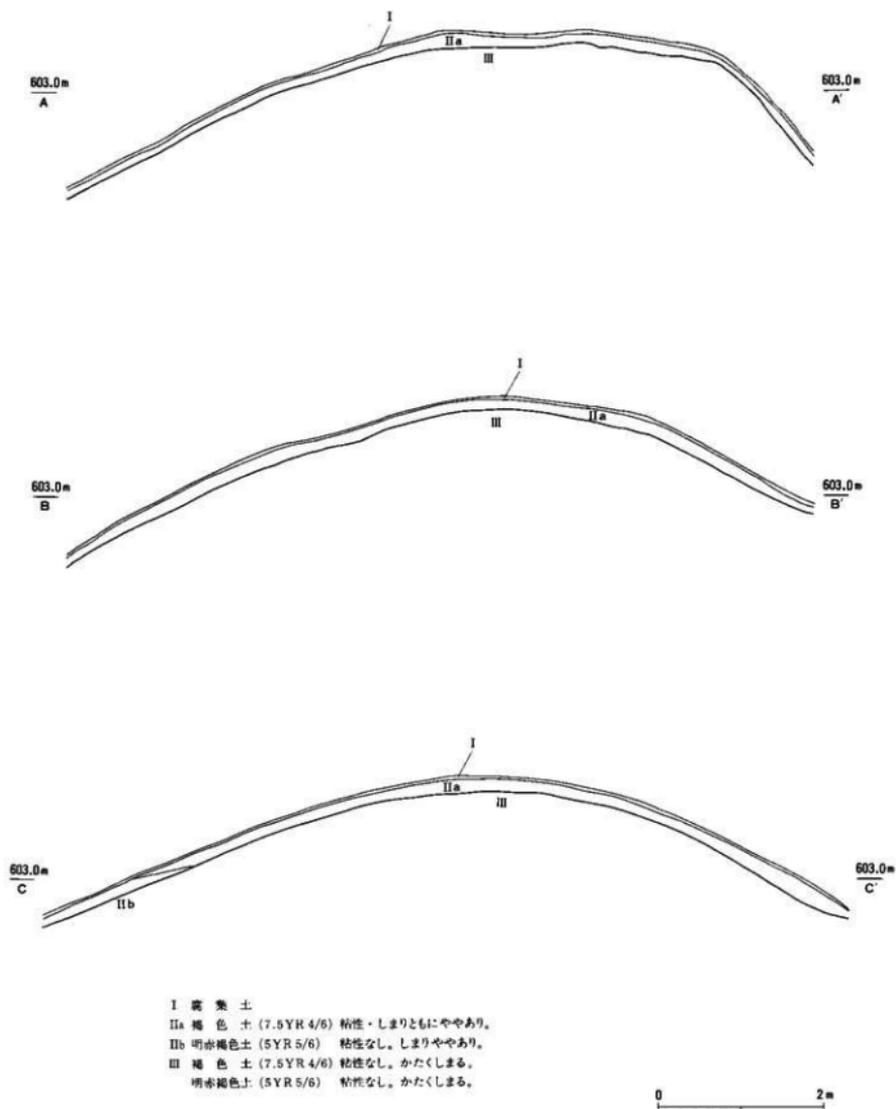


図8 B区土層断面図(1)

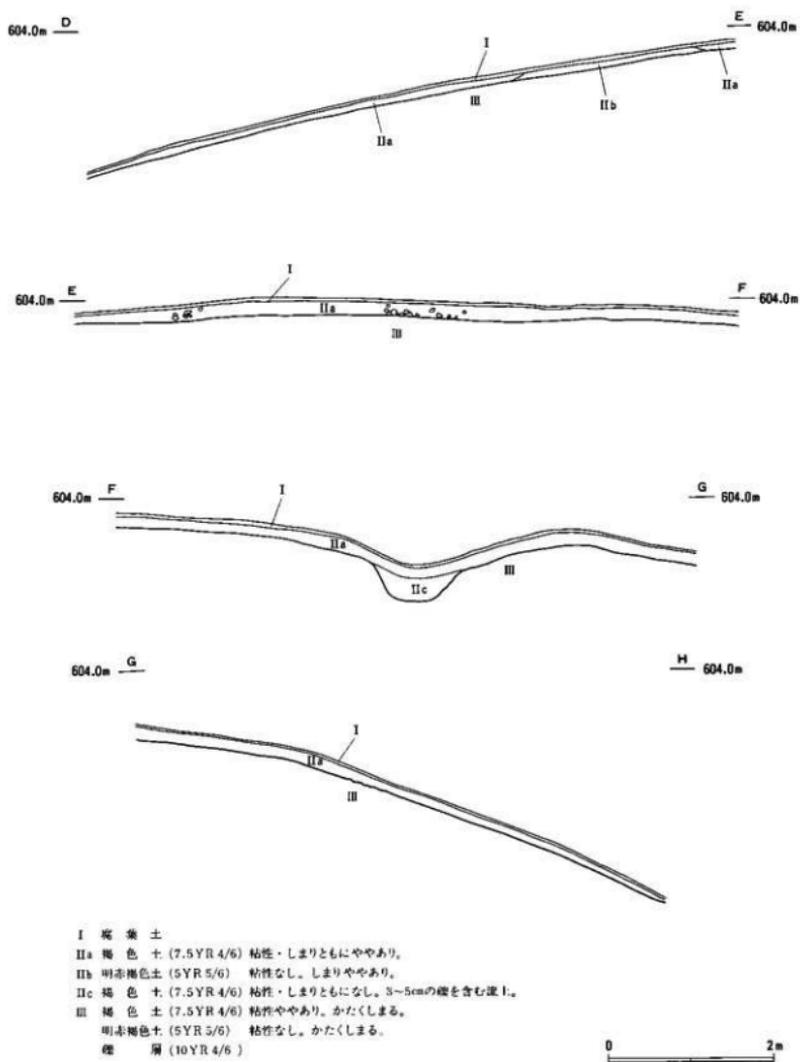


図9 B区土層断面図(2)

第4章 遺構と遺物

第1節 遺構・遺物の概要

本古墳群は、南に位置する見量山から北北東に伸びる丘陵尾根先端部に位置する。北側の尾根先端部をA区、A区南側の標高が約10m高くなった地点をB区と設定した。

今回の調査で確認した遺構は古墳2基と土坑3基である。古墳はA区・B区にそれぞれ1基ずつ存在し、A区に立地する古墳を1号古墳、B区に立地する古墳を2号古墳とした。1号古墳では、盛土を確認し主体部を検出することができた。2号古墳については、尾根を東西に切る溝の検出、遺物の出土から古墳と確認した。2基とも形状は方墳である。1号古墳の築造時期については出土遺物から判断し、古墳時代前期初頭と推定した。

1号古墳・2号古墳の中間部や2号古墳の南側丘陵には古墳は築造されていなかったが、用途不明の土坑(SX)を3基検出した。

出土した遺物の総数は242点である。内訳は土師器66点、須恵器170点、土器小片3点、石器類3点である。1号古墳の南側斜面や溝及びSX1から出土した土器類8個体と、2号古墳の溝から出土した磨製石鏃を図示した。

第2節 保別戸1号古墳

(1) 墳丘(図10・11)

1号古墳は丘陵北側の尾根先端部に位置する方墳である。墳頂部の標高は594.4mを測り、丘陵下の水田面とは約20mの比高差がある。

本方墳は、北北東に伸びる稜線に直交する形の溝で尾根を切って築造されている。墳丘の北東側は掘削などで一部失われている。墳形は方形に近く、墳丘の各辺の長さは南辺8.6m前後、西辺8.4m前後を測る。北辺・東辺は一部喪失のため判然としないが、南北・東西の中軸線の長さは共に10m前後を測る。墳丘の高さは東側・西側共に1.5m前後を測る。墳丘の盛土は、溝の排土や周囲の土をかき集めたものと思われる。盛土の流失は見られるが、0.1～0.5mの盛土を確認した。盛土には明褐色土や黄褐色土を用いている。墳丘の南側に存在する溝は長さ6m前後、溝底の幅は0.7～1.2mを測る。溝底面から墳頂までの高さは1m前後を測り、溝の深さは上部で0.2m前後を測る。

墳丘北西側斜面から裾部にかけては厚い赤褐色土層で、炭の小片が検出された。墳丘の北側から西側裾部にかけてテラス状の平坦面が形成されていたが、テラスの検出には至らなかった。墳丘の東側と西側裾部はすぐに岩盤の地山となった。

墳丘南東側の盗掘跡と考えられている窪みは、掘削すると固い地山に行きついたことから盗掘跡ではないと判断した。

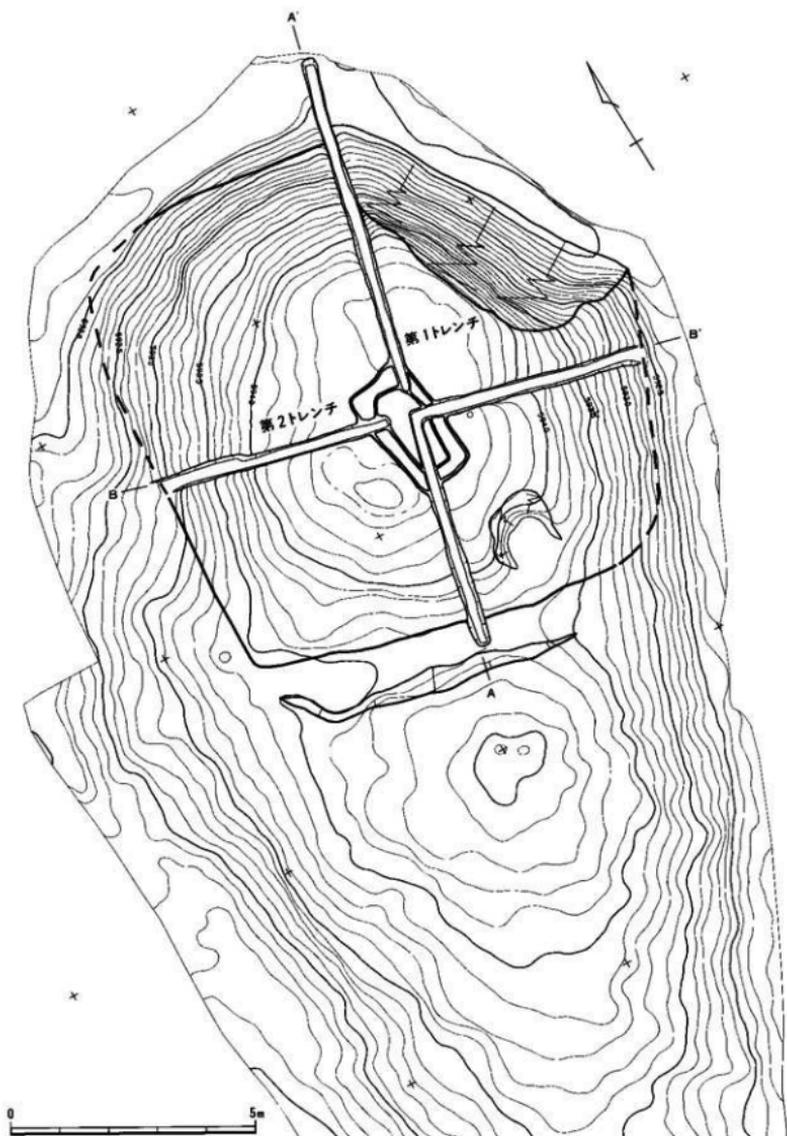
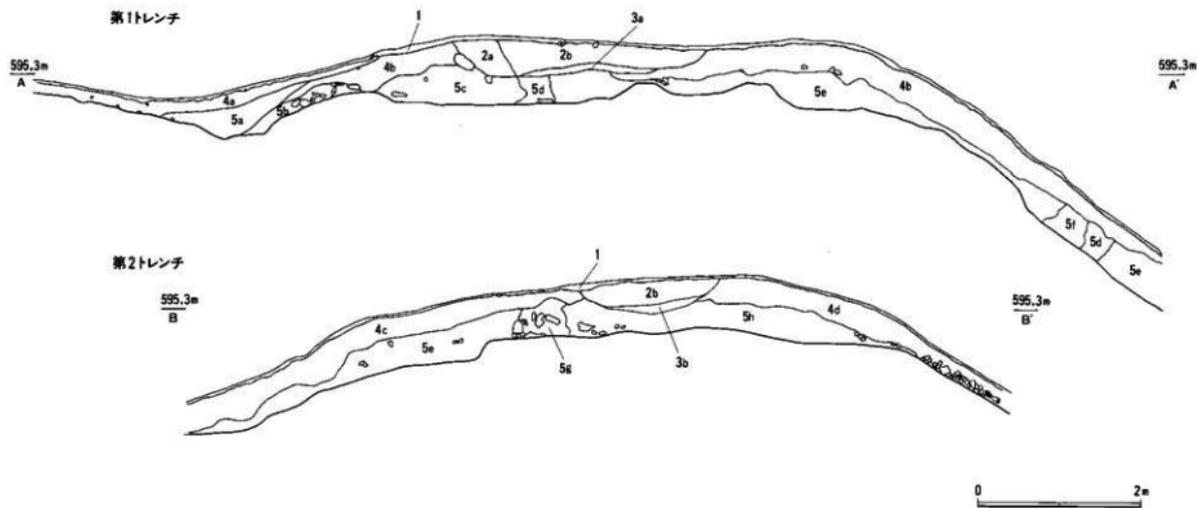


図10 保別戸1号古墳平面図



1 腐葉土

- 2a 黄褐色土 (10YR 5/6) 粘性・しまりともにややあり。墓坑埋土。
 2b 明褐色土 (7.5YR 5/8) 粘性・しまりともにややあり。墓坑埋土。
 3a 明褐色土 (7.5YR 5/6) 粘性・しまりともにややあり。木棺痕跡。
 3b 褐色土 (10YR 4/6) 粘性・しまりともにややあり。木棺痕跡。
 4a 黄褐色土 (10YR 5/6) 粘性・しまりともになし。
 4b 黄褐色土 (10YR 5/6) 粘性なし。しまりややあり。
 4c 明褐色土 (7.5YR 5/8) 粘性なし。しまりややあり。木根が多く入り込んでいる。
 4d 黄褐色土 (10YR 5/6) 粘性・しまりともにややあり。2-10cmの礫を多く含む。

- 5a 黄褐色土 (10YR 5/6) 粘性ほとんどなし。しまりややあり。
 5b 黄褐色土 (10YR 5/6) 粘性・しまりともにややあり。2-10cmの礫を多く含む。
 5c 褐色土 (10YR 4/6) 粘性・しまりともにややあり。
 5d 明褐色土 (7.5YR 5/8) 粘性ややあり。しまりあり。
 5e 明褐色土 (7.5YR 5/6) 粘性・しまりともにややあり。炭化物をごく少量含む。
 5f 赤褐色土 (5YR 4/8) 粘性・しまりともにややあり。しまりあり。
 5g 明赤褐色土 (5YR 5/8) 粘性・しまりともにややあり。風化した礫を多く含む。
 5h 黄褐色土 (10YR 5/6) 粘性ややあり。しまりあり。風化した礫を含む。

図11 保別戸1号古墳墳丘断面図

(2) 主体部 (図12・13)

墳頂部のほぼ中央に、主軸方向をN-7°-Wにとり、隅角をやや丸くおさめた長方形を呈する墓坑を検出した。墓坑の規模は長軸2.6m、短軸1.5m、検出面からの深さ20cm前後を測る。墓坑の埋土には墳丘盛土と同じく明褐色土や黄褐色土を用いており、土色では盛土との違いははっきり区分できなかった。しかしながら、盛土と埋土との境に存在する5~15cmの礫の並びや、盛土に比べ埋土の土質は粘性やしまりを持っていたことで区別することができた。また、墓坑内からは5~7mmの炭の小片が各所出土した。

埋葬方法は石室を構築した跡がないことから、木棺直葬であったと考えられる。木棺については、棺材の存在が認められず不明であったが、土層断面の観察により、墓坑内部から木棺の痕跡を確認することができた。墓坑底面上の厚さ5~10cmを測る褐色土層・明褐色土層及び黄褐色土層が棺材の転化したものであると考えられる。底面は平坦ではなくやや丸みを持っていた。

また、木棺痕跡の平面形は、土色の微妙な違いや木棺痕跡に沿って存在する黄褐色粘質土により確認することができた。包含する礫の大きさも異なり、墓坑内には3~5cm前後の礫を含むのに対し、木棺痕跡内の土性は粒径1mm以下、礫含量は約3%であった。黄褐色粘質土は風化礫と考えられ、棺の固定を図るための詰め石とも推定できる。木棺痕跡から推定復元される木棺の規模は、長軸1.9m、短軸0.8mを測る。被葬者の頭位は、北側の短辺がやや広いことから、北であったと推定する。墓坑上面・埋土中いずれからも供献土器などは認められず、また副葬品も認められなかった。

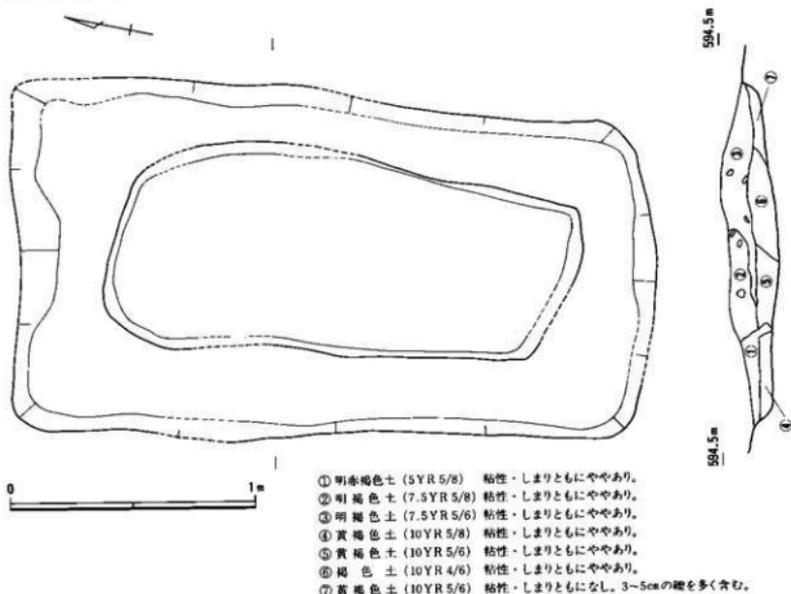


図12 保別戸1号古墳主体部(1)

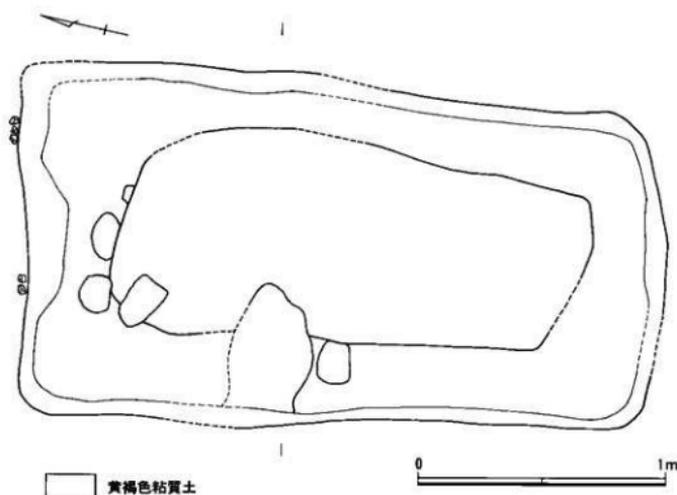


図13 保別戸1号古墳主体部(2)

(3) 遺物の出土状況(図15)

主体部から遺物の出土はない。遺物は墳丘南側から溝にかけて出土している。出土した遺物は次のとおりである。土師器高坏片66片(2又は3個体)。須恵器甕片120片(同一個体)。須恵器甕1点。

須恵器片は墳丘の南南東側から溝にかけて、土師器片は墳丘の南南西側から溝にかけて出土している。須恵器甕片は人為的に破碎されたような状態で出土した。須恵器甕は溝からはほぼ完形で出土した。

須恵器も土師器も1号古墳に伴うものである。しかし、出土した層位については、須恵器片・甕ともにⅡ層から出土しているのに対し、土師器片はその多くがⅢ層から出土している。層位的には、土師器が須恵器より古い時代から遺存していた可能性が考えられ、土師器を1号古墳の築造時期を象徴する個体と考えたい。

(4) 遺物(図14)

①土師器高坏

土師器片66点の内12点が同一地点からまとまって出土し、1個体を復元・実測し得た。

口径12.0cm、脚径8.6cm、器高10.2cm、坏部の深さ4.3cmを測る坏部の深い小型の椀形高坏である。浅黄橙色(7.5YR 8/4)～橙色(7.5YR 7/6)を呈し、砂粒をほとんど含まない胎土である。

坏部は直立気味に立ち上がり、わずかに外反又は内彎して口縁端部となる。坏部の端部に輪積み痕が残り、輪積みで成形している。内面端部と外面に横ミガキ調整が残る。

脚は坯との接合部からそのまま広がりながら段を形成せず端部にいたる。脚裾部はわずかに内彎している。坯部と脚部との接合方法にソケット状の手法を用いている。脚部には透かし孔を穿孔していない。外面に横ミガキ調整が残る。

②須恵器甕

口径9.0cm、体部の径9.6cm、器高8.9cmを測る。青灰色(10BG5/1)を呈し、焼成は良好である。

丸底で張りのある体部中段に、上部の沈線と下部のヘラ削りとの間に櫛描波状文を巡らせるもので、この文様帯に円形の穿孔がある。穿孔から下方へ2条の沈線が垂下する。頸部にも櫛描波状文を巡らしている。口縁部は薄く、頸部から外反して段を形成して外傾する。段は器壁の屈折によって明瞭となっている。頸部から肩部にかけて降灰による自然釉が付着する。回転ナデから判断されるロクロの回転方向は左方向である。陶邑窯系のもと考えられる。

③須恵器甕片

出土した破片120点は同一個体で、その一部を接合し得た。灰色(N4/0)を呈し、外面に敲打痕が見られる。5世紀末のものであると思われる。

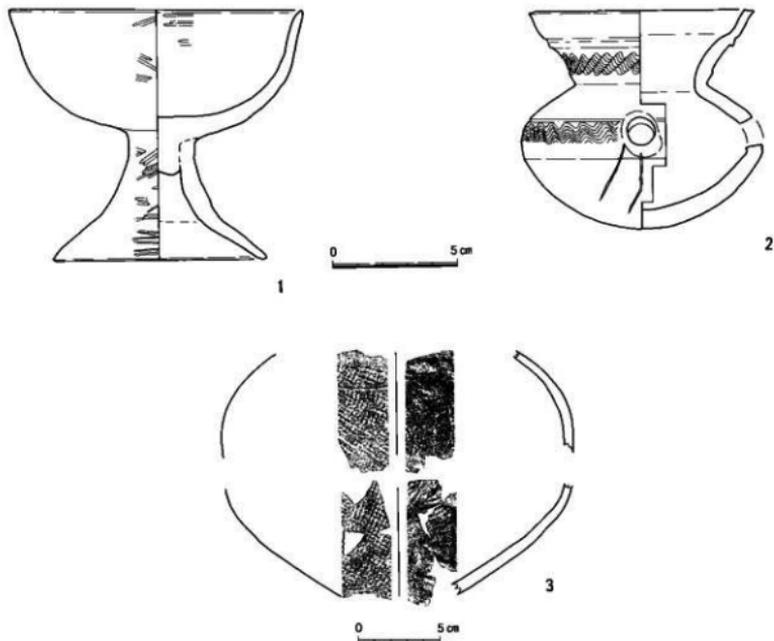


図14 保別戸1号古墳出土遺物

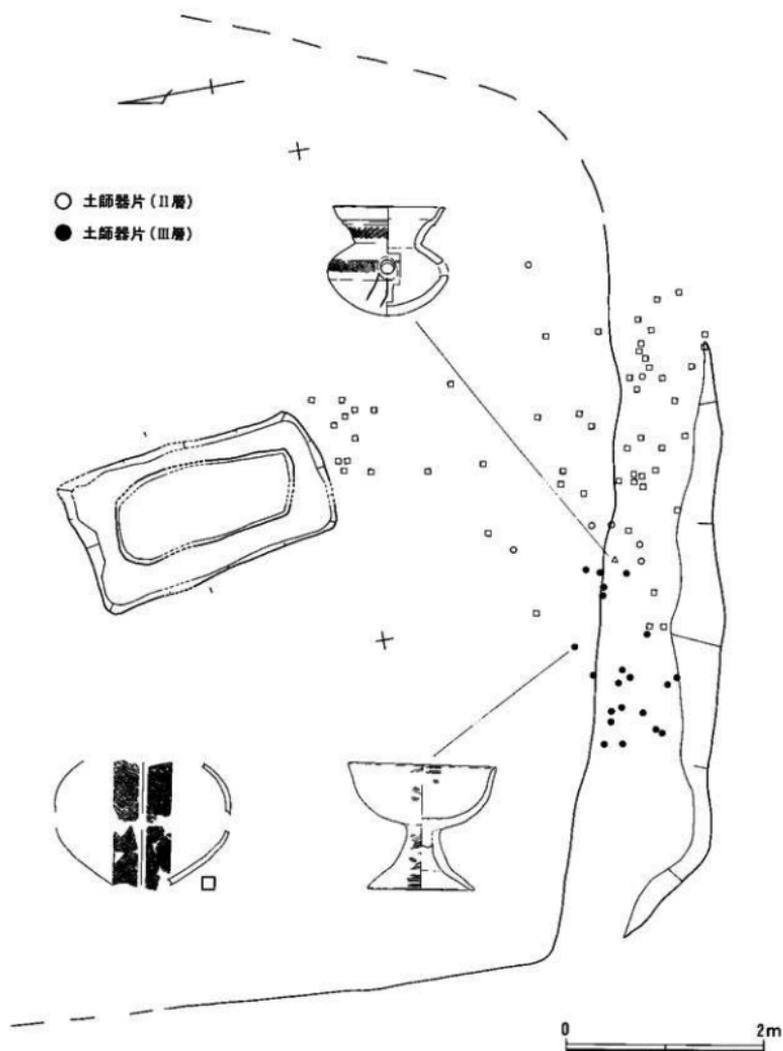


図15 保別戸1号古墳遺物出土状況

第3節 保別戸2号古墳

(1) 墳丘 (図16)

2号古墳は1号古墳と同じ尾根筋の南側約55mに位置する方墳である。墳頂部の標高は603.6mを測り、1号古墳との比高差は約10mである。

本方墳は、北北東に伸びる稜線に直交する形の溝で尾根を切って築造されている。盛土は完全に流失しており、墳丘の範囲・高さは不明である。埋葬施設も残存しておらず不明である。しかし、1号古墳の存在と関連づけて考えると、マウンドの規模、マウンドの南側に尾根を切る溝が存在すること、その溝から遺物（磨製石鏃）が出土したことなど、1号古墳との類似点が多い。

南側の溝は、長さ7m前後、溝底の幅0.5~0.8m、溝の深さは上部で0.5m前後を測る。

マウンド上部からは炭の小片が各所に検出されたが、土器などは認められなかった。マウンドの北側斜面は、すぐに岩盤の地山となっていた。

(2) 遺物 (図17)

遺物は溝から出土した磨製石鏃2片のみである。推定される長さは57mm、幅26mm、厚さ4mmで、石材は頁岩である。基部に近い位置に表裏両面から穿孔している。

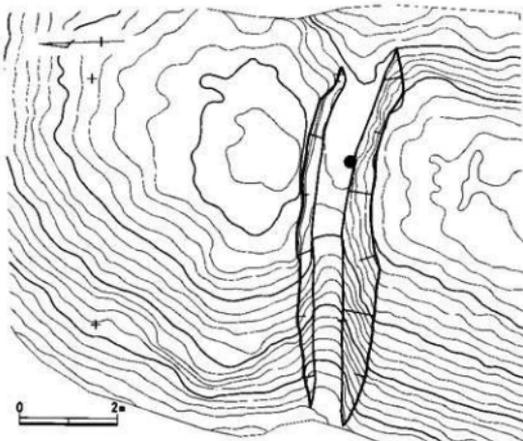


図16 保別戸2号古墳遺物出土地点

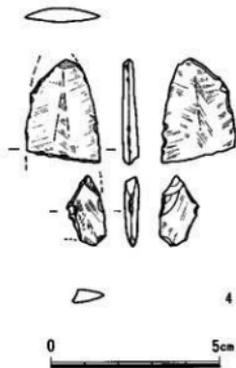


図17 保別戸2号古墳出土遺物

第4節 その他の遺構・遺物

(1) 遺構 (図3)

Ⅱ層において黒っぽい色のプランが認められたため、セクションベルトを設定し調査を行ったところ、3基の土坑を検出した。(北側から順番にS X 1・S X 2・S X 3とする。)

①S X 1 (図18・21)

1号古墳溝の南側約12mの鞍部に位置する。長径1.35m、短径1.05mの歪な楕円形を呈し、深さは22cmを測る。内部には少量の炭化物を含み、壁面は被熱のため一部赤褐色に変色し硬化していた。

また、内部からは須恵器片36点が集中して出土した。周辺からも須恵器片が13点出土している。このうち数片は接合し図化した。図示したのは、高坏2点・無台坏2点・有台坏1点で、いずれも7世紀のものである。

②S X 2 (図19)

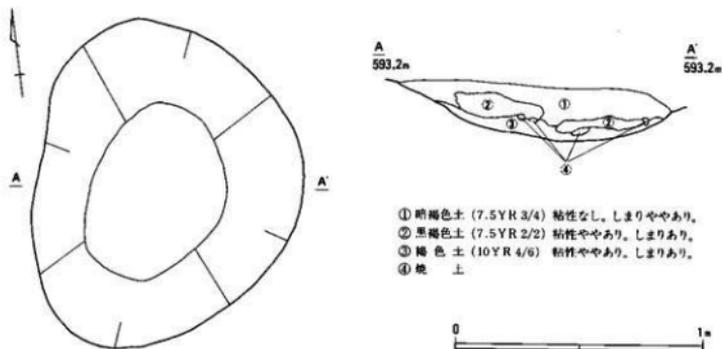
S X 1の南西約16m、約3.5m高くなった斜面上に位置する。等高線に平行する方向に長径をとる楕円形を呈する。長径1.38m、短径0.85m、深さ40cmを測る。底面には多量の炭化物を含み、壁面は被熱のため一部赤褐色に変色し硬化していた。

出土遺物は認められず、時期や用途の特定はできない。

③S X 3 (図19)

2号古墳の南側の方向、調査区の南端に離れて位置している。長径1.45m、短径1.38mの歪んだ円形を呈し、深さは26cmを測る。内部には少量の炭化物を含む。

出土遺物が認められず、時期や用途の特定はできないが、墓域の南端を示す性格を持つ場であった可能性も考えられる。



- ① 暗褐色土 (7.5YR 3/4) 粘性なし。しまりややあり。
- ② 黒褐色土 (7.5YR 2/2) 粘性ややあり。しまりあり。
- ③ 褐色土 (10YR 4/6) 粘性ややあり。しまりあり。
- ④ 焼土

図18 S X 1

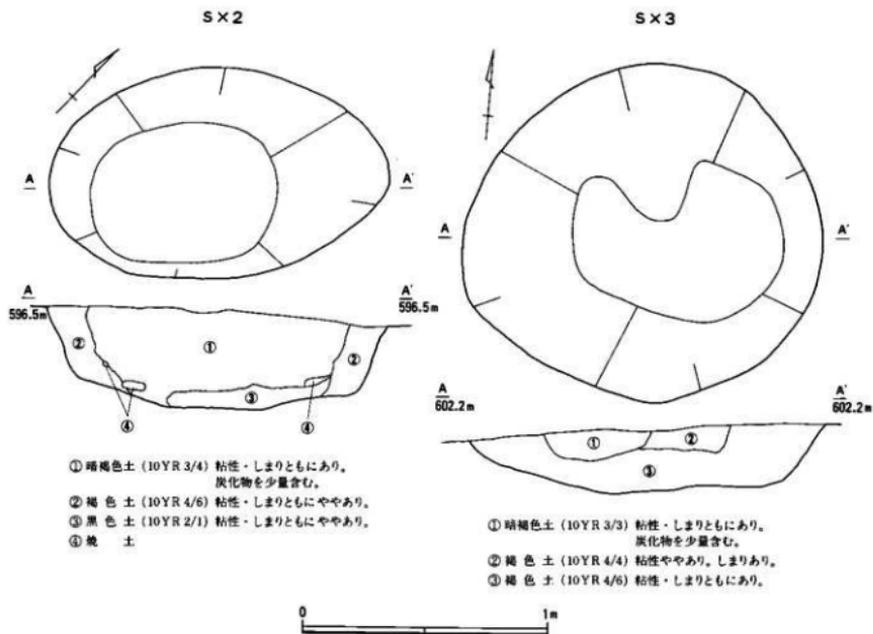


図19 SX2・SX3

(2) 遺物 (図20)

①高坏

5は高坏の坏部で、口径は推定で12.7cmを測る。坏部は直立気味に立ち上がり、口縁は大きく外反して開くものである。口縁端部は上方につまみ上げられている。外面・内面ともに回転ナデ調整を残す。外面には降灰による自然軸が付着している。

6は胎土や色調から5と同一個体と思われる脚部片である。外面・内面ともに回転ナデ調整を残す。底径は推定9.2cmを測る。

②無台坏

7と8は無台坏である。7は体部がやや外反して立ち上がり、底部中央がわずかに凹むものである。体部外面に回転ナデ調整を残す。8は体部がやや外反して立ち上がり口縁端部となるものである。底部は平底であるが、わずかに凹む。外面・内面ともに回転ナデ調整を残す。

③有台坏

9は底径5cmの有台坏である。付高台は一部を残し剥落している。外面・内面ともに回転ナデ調整を残す。

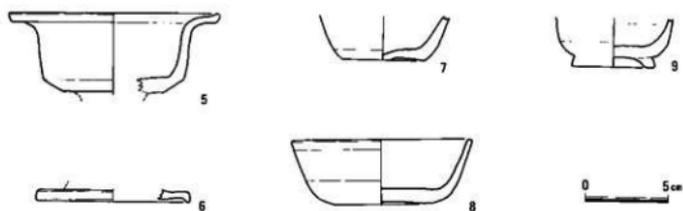


図20 S X 1出土遺物

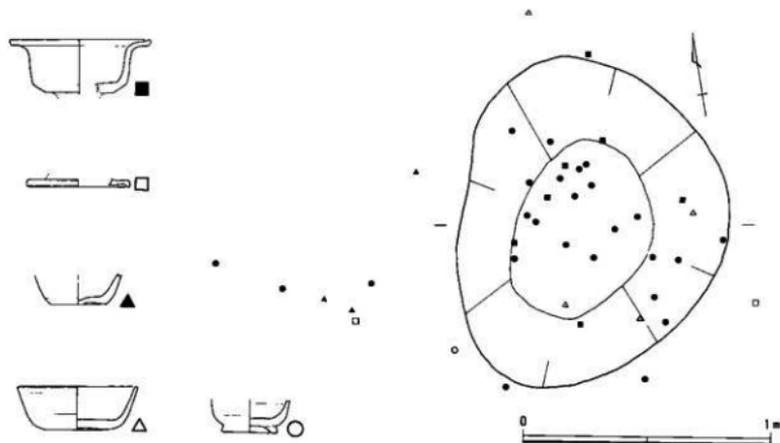


図21 S X 1遺物出土状況

表2 土器観察表

遺物番号	遺構	層位	器種	法量 (cm)			調整		焼成	色調	残存状態	層別	図版	
				口径	器高	底径	外面	内面						
1	S Z 1	Ⅲ	土師器高坏	(12.0)	10.3	4.3	横ミガキ	口縁部横ミガキ	良好	浅黄褐色 7.5Y R 8/4 ~ 橙色 7.5Y R 7/6	口縁部1/2	14	11	
2	S D 1	Ⅱ	須恵器甕	9.0	8.9		回転ナデ 体部へラ削り		良好	青灰色 10B G 5/1	ほぼ完形	14	11	
3	S Z 1	Ⅱ	須恵器甕				タタキ	タタキ	良好	灰色 N 40			14	11
5	S X 1	①-②	須恵器高坏	(12.7)			回転ナデ	回転ナデ	良好	灰色 5Y 6/1	1口縁部2/3	20	12	
6	S X 1	①-②	須恵器高坏			(9.2)	回転ナデ	回転ナデ	良好	灰色 5Y 6/1	底部1/2	20	12	
7	S X 1	①	須恵器無台坏			(5.0)	回転ナデ	回転ナデ	良好	灰色 5Y 6/1	底部1/2	20	12	
8	S X 1	①-②	須恵器無台坏	(10.9)	(3.9)	(6.5)	体部回転ナデ		良好	暗青灰色 10B G 4/1	底部1/2	20	12	
9	S X 1	①	須恵器有台坏			5.0	回転ナデ	回転ナデ	良好	暗青灰色 10B G 3/1	底部1/2	20	12	

・法量で () の無い数値は実測値である。() の付いた数値は復元・推定した値を表している。

第5章 まとめ

1 保別戸1号古墳の築造時期について

古墳の築造年代を推定する手がかりとしては、出土した遺物の年代推定が最も有効なものである。1号古墳に伴う遺物として出土した土師器と須恵器はともに墳頂部で供献されたものが墳丘裾部や溝へ転落した可能性が高い。第4章第2節でも述べたように、土師器が1号古墳の築造時期を象徴する遺物であることから、復元・実測し得た土師器高坏の年代を土器編年に基づき考察したい。東海地方の土器編年である廻間編年をそのまま用いることはできないが、変化の傾向を部分的に比較することで、その位置づけは可能であると考えられる。

1号古墳から出土した高坏は、①口径が脚径を凌駕する椀形高坏であること、②坏部は比較的深みがあること、③坏部と脚部との接続はソケット状に接合する手法を用いていること、④脚部には透かし孔の穿孔がないこと、⑤脚裾部に内彎傾向があること、⑥器壁外面の最終調整は横ミガキであることに特色があると考える。④の脚部に透かし孔をもたない点を除くと、これらの特色は廻間式の範疇でとらえて良いと思われる。②の坏部の形状は廻間Ⅱ式2段階～廻間Ⅲ式2段階の、⑤の脚部は廻間Ⅲ式1段階以前の、⑥の調整手法は廻間Ⅱ式3段階～廻間Ⅲ式4段階までの特色である。

透かし孔の欠如などは東海地域とは明らかに異なり、飛騨地域の特徴ととらえることができる可能性もあるが、現時点では飛騨地域において同時代資料が極めて少なく、検討を行うことはできない。現段階では、東海地方の編年を授用して、廻間Ⅱ式後半～廻間Ⅲ式前半に位置づけておきたい。保別戸1号古墳の築造年代もおおよそこの土器の年代に近い時期と推定する。

2 古墳の立地について

1号古墳と2号古墳は同じ尾根の稜線上に約55m離れて存在している。墳丘を尾根の稜線上に造営するのは古墳造営の基本であると考えられるが、本古墳群とはほぼ同じ時期でも、金ヶ崎遺跡（可児郡御嵩町）のように集落が想定される片側の斜面に寄って造営する事例も見られる。これは弥生時代以来の東海地方における墓域の立地を受け継ぐものとも考えられる。北陸の墳墓・古墳群は、弥生時代の墳墓（方形台状墓）出現から、尾根の稜線上に立地し、古墳時代になっても墳丘の立地は変わらない。その意味で、本古墳群は北陸的な立地と言えよう。とは言うものの、本古墳群の立地が北陸の影響によるものかどうかは、この事例だけでは判断できない。

仮に北陸の方形台状墓の影響を受けているとするならば、墳墓は尾根先端部から高所へ向かって造営されると言われており、本古墳群については1号→2号古墳という先後関係が成り立つ。また、1号古墳の南側にはまだ造墓スペースがあるにも関わらず、墓域を移動している。2号古墳の南側にも十分な造墓スペースがあるにも関わらず、墓は造営されていない。このように墳丘が接しないで間において造営されるような立地は中心的な古墳群ではなく、その周辺にあるような下位に位置する古墳群であると考えられる。墓坑内からの副葬品が認められなかったことも、墓域の性格を考える上で重要であると思われるが、この点については今後の課題としたい。

3 周辺の遺構・遺物について

1号古墳墳丘や溝から出土した須恵器甕や壺片の年代は5世紀後半と推定される。前述した土師器高坏の年代とは1世紀半以上の隔りがある。また、SX1から出土した須恵器片の年代は7世紀頃と推定され、さらに1世紀以上の隔りがある。これらの出土遺物は、1号古墳築造後長い年月の間、その墓を利用して祭祀を執り行った際、供献されたのではないかと考えられる。甕はほぼ完形であることから、墳丘から溝に転落したものと思われる。須恵器壺片は細片で出土したことから、人為的に破砕された可能性がある。

SX1については、焼土坑であることから、1号古墳周辺において何らかの祭祀的行為が行われ、その行為の執行される過程で土器が破砕された可能性がある。

2号古墳の溝から出土した磨製石鏃については、飛驒において出土は稀少で、儀器・宝器としての性格を有していた可能性もある。2号古墳においても、古墳に関わる何らかの祭祀的行為が行われたのではないかと考えられる。

しかし、墓前祭祀が継続したとしても、1号古墳築造後300年に及ぶ長期間に、新たな造墓が行われなかったとは考えがたい。この空白を埋めるのが、近在に造営されている古墳若しくは古墳群であると思われるが、現在のところ不明である。

4 飛驒地域における保別戸古墳群の位置

飛驒地域の古墳築造時期については、本古墳群を調査するまでは、4世紀後半とされる国府町所在の三日町大塚古墳が最も古い時期の古墳と考えられ、以後5世紀に入ると、国府町所在の南垣内古墳・亀塚古墳・高山市所在の赤保木5号古墳・冬頭塚古墳などが平地若しくは河岸段丘上に築造される。そして、5世紀末に冬頭山崎2号古墳が丘陵尾根先端に築造される。

6世紀に入ると、飛驒地域における導入期の横穴式石室を持つ古川町所在の信包八幡神社古墳、国府町所在の十王堂古墳・かうと洞2号古墳などが築造される。これらの古墳は特殊な石室を持ち、美濃地域・北陸地方には類例の認められないもので、北部九州の影響の元に成立したのと考えられ、北陸地方又は日本海を経由した北部九州とのつながりを色濃く示している。

7世紀になると、巨大石室を持つ国府町所在のこう峠口古墳・広瀬古墳などが築造されるが、これらの古墳は美濃地域の影響を受けたものと考えられている。

古墳時代後期には、山麓から山上近くの各所に、数基から十数基の横穴式石室を持つ円墳の群集墳が造られる。飛驒の古墳の大半がこの時期に含まれる。それまで地域の首長や有力者に限られていた古墳築造が広い範囲に広がったことを示している。しかしながら、その存在が知られている山上古墳の多くは調査が及んでおらず不明である。

今回調査を行った保別戸古墳群は、これまで最も古い時期であると考えられていた三日町大塚古墳よりもさらに古い古墳時代前期初頭に築造されたことが推定された。しかも、それは墳丘の規模や形状から弥生時代の墓の形を踏襲している可能性が強く、また、7世紀以前は北陸地方からの影響力が大きかったことを考えると、北陸地方に多い方形台状墓の影響を受けている可能性が強いと言える。

注) 文章の2については赤澤徳明氏の御教示を得た。

参考文献

- 赤塚次郎 1990「廻間式土器」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集
 ＊ 1994「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48集
- 岐阜県文化財保護センター 1992「深沼遺跡」岐阜県文化財保護センター調査報告書第8集
 岐阜県文化財保護センター 1997「与島古墳群」岐阜県文化財保護センター調査報告書第33集
 岐阜県文化財保護センター編 2001『岐阜県新発見考古速報』
- 国府史学会 1996「国府町古墳遺跡分布図」
 国府町教育委員会 1972『国府町の文化財』
 国府町教育委員会 1993『国府町遺跡詳細分布調査報告書』
 国府町教育委員会 1993「半田垣内遺跡」国府町埋蔵文化財調査報告書第2号
 国府町教育委員会 1995「南垣内遺跡」岐阜県国府町教育委員会調査報告書第3集
 国府町教育委員会 1998「桜本遺跡」岐阜県国府町教育委員会調査報告書第4集
 国府町教育委員会 2001『和田口古墳調査報告書』
- 高山市教育委員会 1995『岐阜県高山市遺跡地図 遺跡台帳編』
 高山市教育委員会 1971『冬頭王塚発掘調査報告』
 高山市教育委員会 1995『高山市内遺跡発掘調査報告書 第22号』
- 成瀬正勝 2000「砂行1号古墳と遺物」『砂行遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書第65集
 成瀬正勝・上出巳吉 2000「冬頭山崎古墳群に関する考察」『冬頭城跡・冬頭山崎1号古墳・冬頭山崎2号古墳・冬頭山崎1号横穴』岐阜県文化財保護センター調査報告書第61集
- 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 1999「袖高林古墳群」福井県埋蔵文化財調査報告書第46集
- 森浩一・八賀晋編 1997『飛驒 よみがえる山国の歴史』大巧社
- 吉朝則富 1990「飛驒の弥生時代石器」『どっこいし』高山考古学研究会会報第33号
- 八賀晋編 2001『美濃・飛驒の古墳とその社会』同成社

圖 版



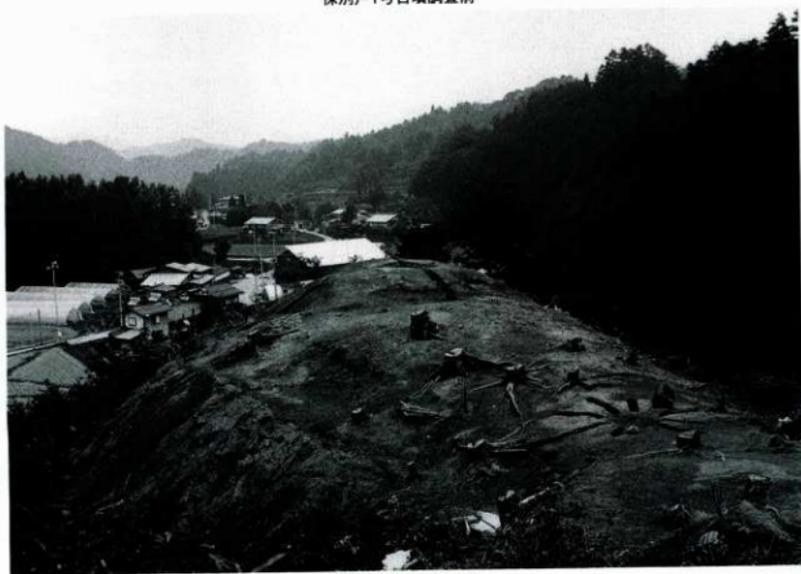
保別戸古墳群全景



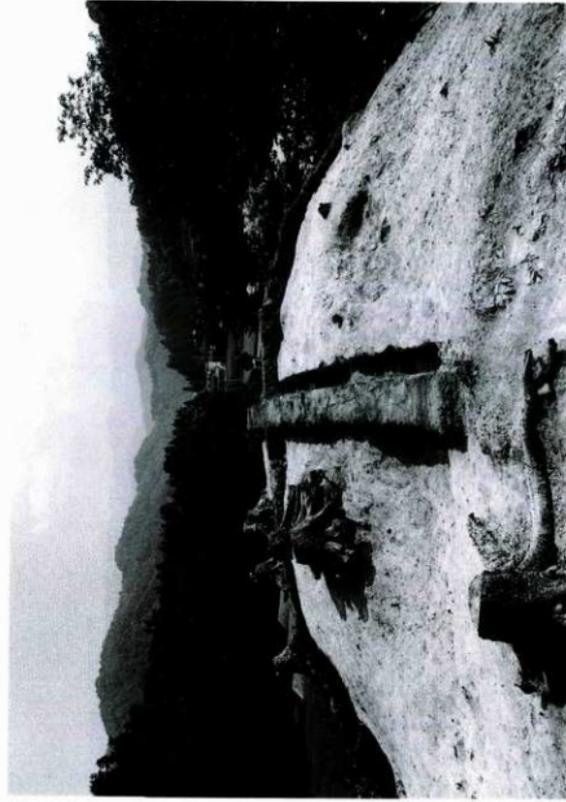
保別戸1号古墳全景



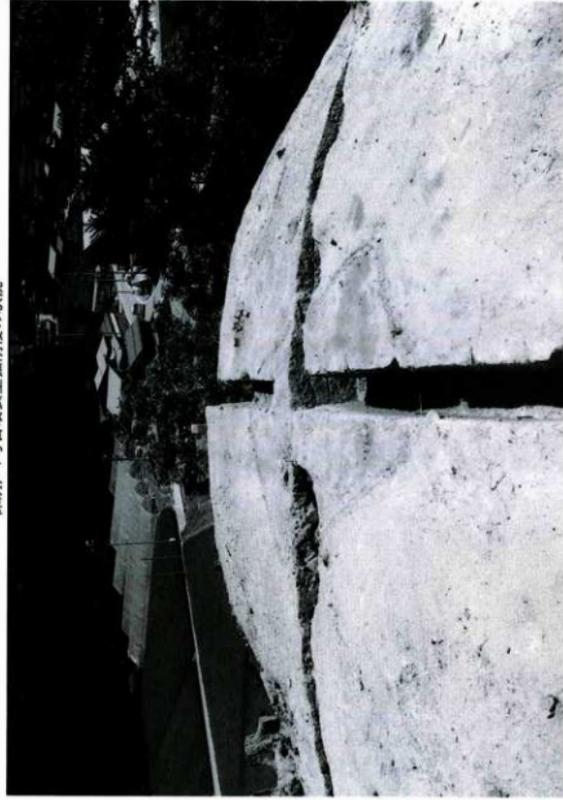
保別戸1号古墳調査前



保別戸1号古墳調査後



保別戸1号古墳出土土器附体の状況



保別戸1号古墳主体部発出状況



保别户1号古墳木棺痕跡検出状況(1)



保别户1号古墳土層断面



保别户1号古填木棺痕跡検出状況(2)



保别户1号古填主体部完掘状况



保別戸1号古墳 土師器高坏出土状況



保別戸1号古墳 須恵器甕出土状況



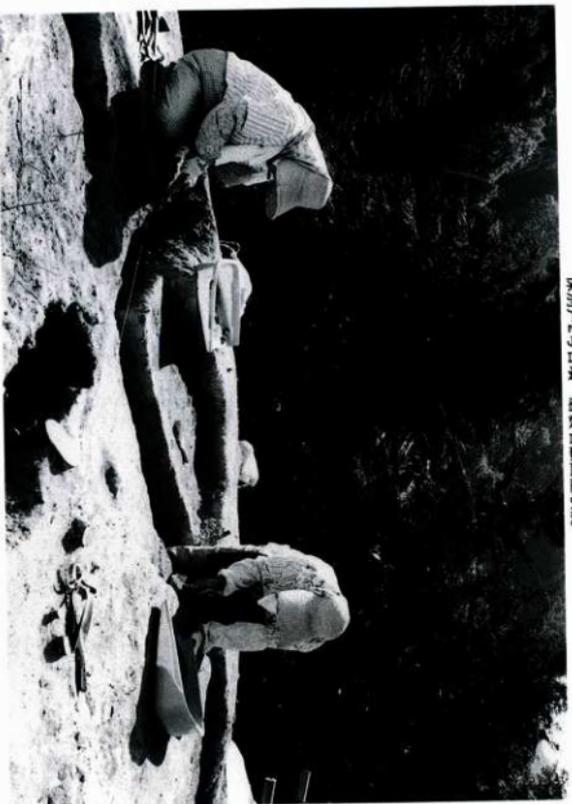
保別戸2号古墳全景



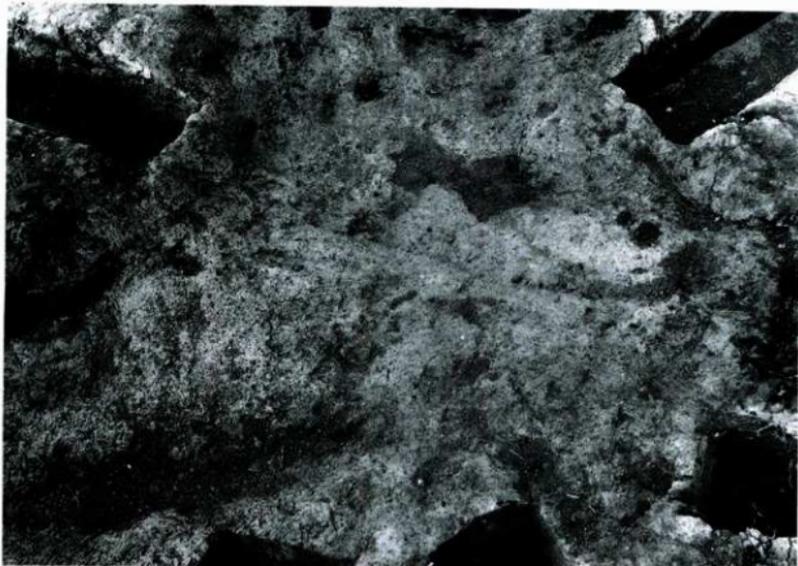
保別戸2号古墳表土掘削後の状況



保別戸2号古墳 磨製石鏃出土状況



作業風景



S X1



S X1 須惠器有台坏出土状况

EXHIBIT 10



S X 2



S X 3



1

土師器高坏



2

須惠器甗



3

須惠器甗

保別戸1号古墳出土遺物



磨製石鏃



4



7

須恵器無台坏



8

須恵器無台坏



5

須恵器高坏



6

須恵器高坏



9

須恵器有台坏

報 告 書 抄 録

ふりがな	ほべつとこふんぐん					
書名	保別戸古墳群					
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター調査報告書					
シリーズ番号	第75集					
編著者名	森下茂司 下畑五夫					
編集機関	財団法人岐阜県文化財保護センター					
所在地	〒502-0003 岐阜県岐阜市三田洞東1-26-1 TEL 058-237-8550					
発行年月日	西暦2002年3月29日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間 調査面積	調査原因
保別戸1号古墳 保別戸2号古墳	岐阜県 吉城郡 国府町 瓜栗	21622-09660 21622-09661	36° 11' 00"	137° 12' 52"	800㎡ 20010514～ 20010928	県営中山間地 域農村活性化 総合整備事業 に伴う
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
保別戸1・2号古墳	古墳	古墳	古墳 2基	土師器 須恵器 磨製石鏃	尾根先端部に古墳時代前期 初頭の方墳 木棺直葬と思われる痕跡	

岐阜県文化財保護センター調査報告書 第75集

保 別 戸 古 墳 群

2002年3月29日

編集・発行 財団法人岐阜県文化財保護センター
岐阜県岐阜市三田洞東1-26-1

印 刷 有限会社 竹本写植